

- わたしの提言
- わたしの講義
- 研究室だより
- 学内トピックス
- 前号を読んで

EF

文理融合への道

青木三郎

人文科学研究科教授 北アフリカ研究センター共同研究員

北アフリカ研究センターの挑戦

本学北アフリカ研究センター(北アと略す。)の活動に数年前より参加しています。北アの特徴は、地球規模で解決すべき科学技術の問題(人口爆発、食料問題、環境問題等々)、人文社会の問題(世界の民主化、対話と平和、文化の多様性・独自性の尊重、共存・共栄の実現等々)に対する問題解決型研究です。北アには、バイオテクノロジー研究、乾燥地環境研究、情報コミュニケーション研究、人文社会研究部門があります。北アは領域横断的な研究センターという点が特徴です。北アフリカという未知で多様性に富んだ領域に挑戦することによって、今解決しなければならない地球レベルの様々な問題(地球的問題群)の解決モデルを提言するという目標をもっています。

文明参加型研究

科学技術研究に対して、文化研究はある

社会(共同体)に特有な知識や価値を研究対象とします。〈北アフリカ〉を研究対象にしますと、狭い意味での地域研究を越えて、科学研究は文化研究を抜きにしてはありえません。そこに理系と文系との交差する場が生まれます。ここには二つの問題があります。一つは、北アフリカの研究によって、私たちの人文社会学的知見、文明に対する考え方をどのように変えることができるか、どのように深めることができるかという点です。もう一つは、理系の研究と文系の研究をダイナミックに関係づけるにはどうすればよいか、という点です。このように、北アフリカ研究を通じて、文明に対する新たな認識を作っていこう、新たな理系・文系の融合研究に参加していこう、というのが北アに集まる研究者の姿勢です。自分の研究がどのように参加できるか。参与型、参加型研究が求められるのです。

環地中海構想

北アフリカ研究は日本ではほとんど行われていません。イスラム世界の研究は、戦前の大東亜共栄圏構想時代の日本回教研究所などを除けば、日本が中東を中心にアラブ・イスラム世界に注目するようになるのは60年代後半から70年代にかけて、中東の石油エネルギー産出国と関係しています。しかし主流となる中東地域に的を絞らず、北アは、チュニジアというマグリブ諸国の中でも小国を中心に研究活動をしています。この国は産油国でもありませんが、バイオテクノロジー研究が注目しているように、サハラ砂漠は有用生物・遺伝子の宝庫です。この多様性の観点から見ると、乾燥地研究ではチュニジアの地中海からサハラ砂漠までの気候帯の多様性がユニークです。この多様性は独特の生態系を形成しており、微生物のようなミクロの世界から、沙漠、半乾燥地、海洋のようなマクロの世界までが一つの有機体として全体的に関連しあっている点が特徴的です。文化のレベルにおいても、この地域の多様性は重要です。チュニジアは地中海世界の一員であり、地中海世界へのアクセスを可能にします。またアラブ・イスラム世界の一員であり、アラブ・イスラム世界へのアクセスを可能にします。さらにチュニジアはアフリカ大陸の一員であり、アフリカ世界へのアクセスを可能に

します。地中海—アラブ・イスラム—アフリカという複合的な地理的・歴史的・政治的・文化的空間の中に位置づけられるわけです。

その中でもとりわけ重要なのが、<地中海—アラブ世界>という軸です。周知のようにヨーロッパと地中海に面するアラブ諸国は2010年に関税をとっばらい、自由貿易ゾーンを形成することを1995年に決定しました。つまり環地中海という大きな政治的・経済的空間を構築しつつあるわけです。チュニジアはまさにその渦中にいます。それ以前の北アフリカ—マグリブ地域は、1830年代に始まるフランスの植民地時代、20世紀半ばの独立の時代を通じて、宗主国フランスと被支配マグリブ諸国という関係図式の中にありました。それに対して未来志向でマグリブは、ヨーロッパ連合と地中海アラブ連合という新たな関係パラダイムで捉えるべき時代に来ているといえます。

北アフリカの諸問題

2004年12月に本学代表団の一員としてチュニジア政府を訪問する機会を得ました。当時の首相、外務大臣、高等教育大臣、文化大臣、農業環境水資源大臣と実際にお会いして、科学技術と文化の両面において、日本とチュニジアで双方向の交流のモデルを構築することの重要性が話題となりました。

た。バイオ技術、特に麦の品種改良への応用、および食料安定、水資源の確保、再利用可能エネルギーの問題、沙漠化防止のための緑化の問題、ITの人材育成の問題、世界遺産の保全やスポーツ交流など文化的交流の問題など様々なことが話し合われました。折しもチュニスでは環地中海5x5サミットが開かれていました。このサミットは地中海に面する西ヨーロッパの5カ国（スペイン、ポルトガル、フランス、イタリア、そしてマルタ共和国）と北アフリカ側5カ国（チュニジア、アルジェリア、モロッコ、モーリタニア、リビア）が1990年10月にローマで合意した国家間対話のシステムから出発したものです。政治レベル、経済レベルのみならず、社会的、文化的レベルでも協議が継続的に行われています。ヨーロッパ側と北アフリカ側の経済格差の是正、移民労働者の問題、教育、文化遺産の保全の問題などがテーマ化されています。各地方、各国の経済発展と政治的安定を確立し、地中海世界に平和の共存の空気をかもし出すことの重要性が強調されています。そのためには地中海文化圏への文化的なアイデンティティを強めるような文化振興プログラムを作っていくこと、地中海人としての共通の価値観、共通の起源をもつ文明間の対話といったものを重要視することが確認されています。ヨーロッパにとってはマグリ

ブからの移民労働者の問題は重大な案件の一つです。経済レベルでの協力を通じて、不法移民労働者、犯罪の防止、テロリズムの抑止などの問題を戦略的に解決していくという流れがあります。これらの数年の動きを見てみますと、いかに、ヨーロッパとマグリブの関係が深く、そして、新たな枠組み作りが現実性のあるものかが分かります。

さて、このヨーロッパと地中海アラブ世界が結びつこうという大きなうねりは、EU・地中海自由貿易ゾーン形成という形で実現しつつあります。この目的は、大きく言うならば、地中海の東および南のアラブ地域の安定化をはかり、経済的自立を促進することです。それによって、移民・難民の流入の減少が期待され、自由な社会資本投資、企業誘致なども可能になります。この貿易地帯に関わる国は、トルコ、レバノン、シリア、ヨルダン、パレスチナ、イスラエル、キプロス、エジプト、マルタ、チュニジア、アルジェリア、モロッコの11カ国と1自治区です。2010年にはEUとの自由貿易地帯を形成することを目指しているわけですが、中でもチュニジアは、オールチュニジアで、新しい体制作りにも全力を挙げています。

EUとの自由貿易ゾーンによってチュニジアの経済が果たして活性化し、経済成長

を促進することになるか。これは一つの大きな、後戻り出来ない賭と言えます。成功させるためには、実効性のある改革が多分野で行われなければなりません。今、チュニジアがほとんど突貫工事のようにして様々な改革を進めているのはそのためです。その中でもとりわけ注目されるのが環境と文化の問題です。環境に関しては、EUの環境基準があり、その基準に適合させるべく、沙漠化防止、土壌の改良、海洋資源・漁業のコントロール、エネルギー、水（浄化、排水など）問題に関して、短期的な、あるいは長期的な政策が画定しつつあります。産業の発展は、こうした環境の保全を伴うものでなければあり得ないわけです。また政治、経済、産業、環境と並んで、文化、社会、そして人材育成も重要です。チュニジアは文化遺産の保全、若者の育成に特に重点を置いているように思われます。雇用促進と職業訓練の制度を積極的に導入しようとしています。また女性の社会進出、包括的な移民問題の解決、そして地中海文明の文明間対話を推進しようとしています。最終的な目標は、この環地中海世界を人々が共有し、安定と安全な空気の中で、差別や暴力、テロを排除して、共存していくことです。

新たなパラダイムの提言

北アは、こうした北アフリカ地域の大き

な時代の動きの中に参加し、あるべき研究の姿を模索しています。北アの文化研究プロジェクトは、哲学・思想・宗教、比較文学、世界遺産、言語研究、それに日本語教育・日本事情などが参加しています。重要なことはEU・地中海世界を形成することではなく、それに参加しながら、日本にフィードバックする研究を実現することです。今、自分にどんな参加が出来るか。自分の専門の殻を破って、自分を変えること。自分の専門にはこだわらない知識体系をも結合する想像力・構想力と勇気をもつこと。そこに人類が直面する問題を解決すべく、新たな人文科学の可能性が生まれるはずで、文理融合の可能性と必然性が強まるはずで

す。本学は今、国際連携に力を入れています。中央アジア研究センターの構想があります。すでに今年の5月にチュニスに北アフリカ・地中海連携センターが設置されました。やがて東アジアから中央アジア、北アフリカ、地中海という点が線になり、本学独自の国際的な研究パラダイムが可能となるでしょう。大きな地殻変動を感じているところです。

（あおき さぶろう／言語学）